

いじめが解決される場合の有効な手立てについての心理学的調査研究

A53186 三上淳子

先行研究から分かったことは、いじめの定義が、『当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの』であること、いじめ被害者は、自己喪失間や自己否定間を感じる悪影響が残ること、誰でもいじめ加害者にも被害者にもなる可能性があること、いじめ加害者の言い分として、「仲間と連帯できる安定感があるから」などがあることが分かった。また、いじめの解決策として、いじめ被害者は、妬まれないことが解決策であり、親や教師がいじめ被害者にできる解決策は、冷静にいじめ被害者の話を聞き、痛みを知ること、教師が加害者にできる解決策は、いじめ加害者のうっ憤がたまらない学級作りをすることが挙げられている。

さらに先行研究からいじめには「被害者」「加害者」「観衆」「傍観者（の中から仲裁者が現れることがある）」の四層構造があるということを理解した。今回の研究では、「観衆」と「傍観者」をあわせて大きな意味での傍観者とし、さらにいじめにかかわる大人「教師」を加えて、誰のどのような具体的行動がいじめ解決につながるのか、またいじめ促進につながるのかというウィルコクソン検定を用いた研究と、いじめがなぜ解決しなかったか、どのように解決したかということ的自由記述で書いてもらう研究をおこなった。

ウィルコクソン検定の結果では、いじめを解決する可能性がある具体的行動として、「いじめっ子のいないところで、いじめられっ子を応援した」が傾向としてあらわれ、いじめを有意に促進してしまう具体的行動として、「手出しをせずに、じっと見ていた」と「他人事なので、かかわり合いにならなかった」があらわれた。この三つの具体的行動は、いずれも「周りで見ている人（すなわち傍観者）の行動」の行動であった。このことから、いじめを解決に導くのも、いじめを促進させてしまうのも、傍観者の行動次第であることが考察された。

自由記述の結果では、なぜいじめが解決しなかったかという理由を以下の①～⑤に分類した。①教師の責任②周りの人から助けが来ない③いじめられっ子が悪い④いじめっ子が悪い⑤その他。そして、いじめがどのような文脈で解決したかという解決への道のりを、以下の①～⑦に分類した。①教師の対応が良かった②周りで見ていた人たちの協力③いじめられっ子の友人の支え④いじめについて学級会をひらいた⑤なんとなく解決した（時間が解決した）⑥いじめはおさまったが、解決とまではいかなかった⑦学校、クラスの雰囲気がいじめを生まない環境だった。いじめが解決する／しないを見比べてみると、いじめが解決した方には、雰囲気につまわるエピソードが報告されている。このことから、クラスの雰囲気すなわち傍観者の態度がいじめを解決する重要な役割を持っているという統計的結果を支持する結果になったと考察する。

結論として、「いじめられる側」「いじめる側」「教師」は、いじめを解決する力をあまり持たず、「傍観者」がいじめを良くも悪くも最も左右していることがわかった。傍観者がいじめ被害者を助けるようになるために、幼い頃からの大人による教育が必要であり、その教育こそがいじめの無い社会を実現する方法だと結論する。

参考文献・森田洋司／清水賢二 1994 新訂版 いじめ 教室の病い 金子書房

・深谷和子 1996 「いじめ世界」の子どもたち—教室の深淵 金子書房 他